

ことばの教室での語り合い

千葉市立あやめ台小学校
渡邊 美穂

はじめに

私は、これまでことばの教室でどもる子どもたちと個別やグループで話し合いの場をつくってきた。はじめは、こちらが質問をして、それに答えるようなやりとりであった。グループ学習でも、一人の意見に質問をすると、その子とのやりとりだけで、他の子は、その様子を聞いているだけであった。しかし、最近では私抜きで子どもたちだけで、どんどん話が進んでいくことが多い。私の役割は、話題と場の提供で十分なのではないかと感じるほどである。最近、この状況に慣れてしまったが、どんどん語りあっていく前はどうか振り返ってみたいと思った。なぜ、そう思ったかという私のことばの教室にいる子は「特別」であると思われていたからである。「うちのことばの教室の子どもたちは、まだ話し合う段階までできていない」とか「大丈夫といって、吃音の話題で話そうとしない」という声を聞く。確かに、話し合っている子どもたちの内容を聞くと、本当にすごいなと感心するような発言が飛び交っている。しかし、はじめからではないし、この子たちは「特別」ではないと言いたい。

吃音について語り合っている子どもたちから「個別とグループは、両方必要。みんなや先生とどもる話ができるのが楽しい」「前は、友だちができるとか、仲良く遊べるのがうれしかったけれど、今は語り合えるのがうれしいし、楽しい」と言われた。このように、語り合いがことばの教室で行われることが大事であるし、子どもたちの望みであることがわかった。

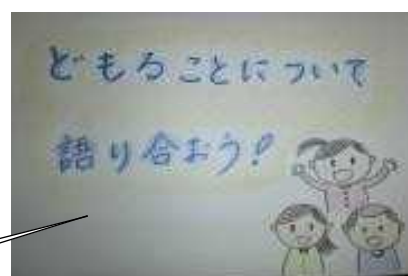
では、「特別」な子どもではなく、吃音の話題をしない子どもたちと語り合うためには、どうしたらよいかを考えたい。いくら話し合いや語り合いが大事であるとわかっていてもやり方がわからない場合の一例として取り組み方を紹介したい。私が、グループ学習を始めた頃などの状況を思い出しながら学習の手立てを考えて、あることばの教室での実践の様子を紹介したいと思う。

実践例：8人グループの初めての話し合い

テーマ：どもることについて話し合おう！

「みんなは、どもるってことば知ってる？」

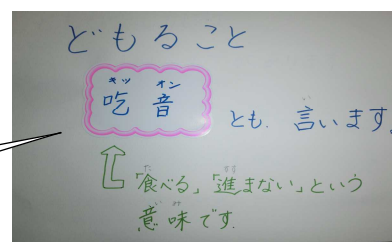
知ってる！



「じゃあ、どもることをちょっと難しいことばで吃音ともいうよ。知ってる？」

「吃という漢字はね、食べるとか進まないって意味があるらしいよ。」

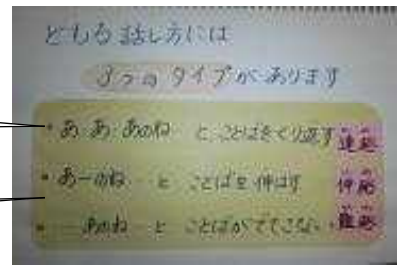
知らなかった。



「どもる話し方は、3タイプあるよ。難しいことばで
連発・伸発・難発っていうよ。みんなはどのタイプ？」

ぼくはね、3つのタイプ全部あるよ。

前は、すごく難発だったよ。



「どもる話し方は、波があるよ。波ってわかるかな？
すごくどもったり、全然どもらなかつたりをくり
返すんだって。その周期は、人によって違うみた
いだよ。みんなはどう？」

ぼくは、1ヶ月ぐらいの間隔だよ。



「みんなは、いつからどもっているの？
はじめてどもった時のこと覚えている？」

年長の時、幼稚園の廊下だよ。覚えている。



「では、どもりが治ったらどうしたい？」

普通に、過ごしたい。

もっと、いっぱいしゃべりたい!

発表とか音読とかしたい!



「では、どもりが治らなかつたらどうする？」

普通に過ごす。

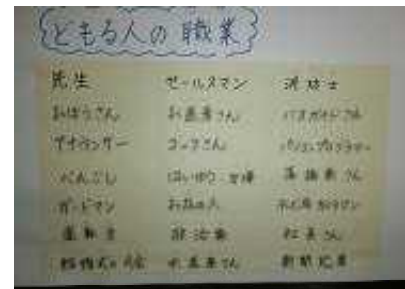
みんなにどもることを話す

気にしない



「私の知っているもっている人は、働いたり結婚したりして自分の人生を生き生き過ごしているよ。」
「それに、いろいろな職業に就いていたよ。話す仕事をしている人もいるね。有名人もいるよ。」

話す仕事にもなれるんだ！



という感じで、話し合いが初めてのグループにこのように声を投げかけてみた。たった8枚の画用紙を持っていただけで、問いかけにどんどん手を挙げて話してくれた。一人の発言に対して、みんなで意見を述べ合うことは、まだできないが、回を重ねていくときっといい話し合いができそうであると思った。

実践から見えてきたもの

この子たちも「特別」な子どもたちではないが、話したい気持ちがたくさんあると実感した。やはり、吃音について話せる場所や共感できる仲間が必要であると思った。また、担当者は、吃音についての知識をもっていて、この子どもたちをどうしたいかという考えをもつことであると思う。更に私の場合は、どれだけもも人と出会って、話を聞いたかが大きかったと思う。

グループ学習が終わり、次の個別学習で振り返りをするだけで、個別でも、吃音について子どもたちは担当者に語ってくれる。語ってくれる子どもたちに、担当者は自分のことやその子のことをどれだけ語れるかが大事だと思う。

私は、子どもたちの前では教師として支援、指導をする立場にある。いつも子どもたちの前に立って、知識をもってよい方向に導かなくてはいけないのかもしれない。しかし、もも子についても、その子の方がよく知っているので、今までどんなふうにご経過してきたのか「きく」ことが大事であると思う。そして、聞いた後に私には何ができるか、何をしてほしいか子どもに聞いている。

ある子に「先生は、何もしなくていい。」と言われた。その時「私にはもも子は治せない。何もしなくてあげられない」と思った。でも、何かをしてあげなくてはいけないと肩に力が入っていた自分から、解放された。一緒にいて、何ができるか考えていくうちに子どもたちは、自分でどんどん生きる力を身につけていくことがわかった。語り合いながら、そのことを見守ることだけで、今はいいのではないかと考える。「何もしなくていい」の意味をきちんと受け止めて、子どもたちの気持ちに答えながら見守っていきたい。